

かゑらじと かねて思へハ 梓弓  
なき数に入る 名をぞとどむる  
四條畷に散った若き武将、楠正行

## 楠正行通信 第1号

平成26年12月9日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

# 南朝の哀史を感じさせる吉野山

## いたる所に残る後醍醐天皇の執念

### 板堀に残る正行公、辞世の句

四條畷ゆかりの人物といえば四條畷神社に祀られる楠正行といえるが、その楠一族を語る上で避けて通れない人物が後醍醐天皇である。

いい意味でも、悪い意味でも、楠親子に大きな影響を与えた後醍醐天皇とはいったいどんな人物だったのか。

私の生まれ故郷でもある吉野、そしてこの間幾度となく訪れてきた吉野山だが、平成25年3月31日に開催した四條畷市主催「第一回楠正行シンポジウム～楠正行の人間像に迫る！」に、パネラーとしてお越しいただいた如意輪寺の加島公信住職にお会いするため、吉野山に向かった。

正平2年12月27日、四條畷の合戦を前に楠正行が一族143名と訪れ、如意輪堂の板壁に辞世の句を書き残した。そして、今もその板壁が残る。

かゑらじと かねて思へハ 梓弓  
なき数に在る 名をぞとどむる

### 笠置で正成公と歴史的出会い

天皇親政にあくなき執念を燃やし続けた後醍醐天皇。正中の変・元弘の変と二回のクーデターに失敗するも、隠岐脱出後は建武の新政を断行する。

元弘元年の討幕計画が事前に漏れると、後醍醐天皇は笠置に入り、幕府軍と対峙する中、楠木正成と歴史的な出会いをすることになる。

今も笠置山の頂上付近に残る笠置行在所の跡地に御製の碑が残る。これからどうなるかわからない不安の中で、色づくもみじにほっと一息つく帝の姿が思い浮かぶ。

うかりける 身を秋風に さそはれて  
思はぬ山の もみぢをぞみる

(増鏡第十五むら時雨)

しかし、建武の新政も、武家政治復権を目指す足利尊氏との衝突を回避すること

ができず、正成を失い、自らはひそかに吉野に移り、南朝復権に執念を燃やし続けるも、延元四年、五十二歳の生涯に幕を閉じること。

延元元年、花山院を忍び出、大和に向かう途、伏見稻荷神社の前で歌われた御製、何ともさみしい三つの灯。

ねば玉の 暗きやみぢに 速ふなり  
われにかさをむ 三つのともし火

(吉野拾遺上)

### 歴代天皇唯一北向きの御陵

「玉骨はたとえ南山の苔に埋まるとも、魂は常に北関の天を望まんと思ふ」(私の体は吉野の地に埋まるとも、私の魂は常に都の内裏を望んでいる)との遺言を残し、如意輪寺境内にある後醍醐天皇陵は、天皇陵として唯一北の方、京都を向いて祀られている。太平記によると、崩御の時、左手に法華経の第五巻、右手に剣を持ち、



この姿を改めることなく、棺を厚くし、お座りになった姿のまま、北向きに葬りもうしあげた、とある。

金峯山寺の田中利典宗務総長は、「月刊大和路ならら」6月号の中で、南北朝時代、吉野が朝廷足りえたわけとして、“全国に張り巡らされた山伏の強固なネットワーク（情報・軍資金・物資）”ではないかとした上で、霊地である山深さが自然と共生する日本人独特の精神性が吉野にあったからこそ、現在に残る日本独特の文化興隆の画期になったのが南北朝時代だった、と振り返る。

私自身、吉野に生まれ、今四條畷に住まいしている。正行公を通じ、南朝との縁を感じずにはいられない。そして、そのようなえにしを感じながら、吉野山を歩いて来たが、今回の訪問は、今までにはなく、いたるところで後醍醐天皇の陰を強烈に感じた。

後醍醐天皇の生涯に思いを馳せ、南朝皇居となった吉水神社を訪れた。

### 玉座の間は畳十数枚の狭い部屋

吉水神社は、今から凡そ千三百年前に役行者が創立した修験宗の僧坊で、日本住宅の源流をなす最古の書院建築で、後醍醐天皇玉座の間が残る。廊下一つで外に連なる畳十数枚の狭い部屋の下を瀬古川が流れる。

おそらく瀬古川のせせらぎを聞きながら、次の歌を詠んだのかと思うと、なんとも言いがたい南朝の哀史を感じる。

花にねて よしや吉野の吉水の  
枕の下に石走る音



ある時、後醍醐天皇は吉水院宗信法印に問いかける。

みよし野の 山の山守 ことどはん  
今いくか ありて 花やさきなん

その時、宗信法印は次の歌を返す。

花さかん 頃はいつも 白雲の  
いるを知るべに みよし野の山

「吉野の山の桜、そしてわが人生の花は、いつ咲くのだろう。」「花がいつ咲くか分かりませんが、必ず素晴らしい花が咲きますよ。」との意だが、玉座の前に立つと、後醍醐天皇、南朝の悲哀がひしひしと伝わってくる。

私達が四條畷で楠正行公を熱く語るように、この吉野では、豪僧宗信法印公を天皇に味方し吉野朝廷生みの親ともいえる忠臣として讃える。そして、正成公ともども吉水神社に合祀されている。

修験者が大峰山に入山するに当たり、平穩無事に下山できますようにと九字真法による邪気祓いを行った吉水神社の北闕門で、この歌は詠まれた。

### かいそめの住まいが、終の棲家に

また吉水神社境内には、名勝「一目千本」がある。この境内から吉野山の桜が一望できる絶景の場所に立ち、谷向うに如意輪寺を見ながら、あくなき南朝復権、いや京の内裏を望んだであろう後醍醐天皇の生き様、執念を感じつつ吉野山を後にした。

ここにも 雲居の桜 咲にけり  
ただかりそめの 宿と思ふふに

(新景和歌集巻第二)



かりそめの住まいと思っていたのに、ここにも桜が咲いた。

知らぬ間に月日を重ねてしまったようだ。

都だに さびしかりしを 雲晴れぬ  
吉野の奥の 五月雨のころ

(新景和歌集巻第三)

梅雨の頃、都でもさびしかったのに、雲が晴れることのない吉野の山奥の寂しさはなおさらだ。

(文責：「四條畷楠正行の会」代表 扇谷 昭)